



Informatica® Mass Ingestion
April 2024

トラブルシューティング

© 著作権 Informatica LLC 2019, 2024

本ソフトウェアおよびマニュアルは、使用および開示の制限を定めた個別の使用許諾契約のもとでのみ提供されています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複製、写真複製、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。

米政府の権利プログラム、ソフトウェア、データベース、および関連文書や技術データは、米国政府の顧客に配信され、「商用コンピュータソフトウェア」または「商業技術データ」は、該当する連邦政府の取得規制と代理店固有の補足規定に基づきます。このように、使用、複製、開示、変更、および適応は、適用される政府の契約に規定されている制限およびライセンス条項に従うものとし、政府契約の条項によって適当な範囲において、FAR 52.227-19、商用コンピュータソフトウェアライセンスの追加権利を規定します。

Informatica、Informatica Cloud、Informatica Intelligent Cloud Services、PowerCenter、PowerExchange、および Informatica ロゴは、米国およびその他の国における Informatica LLC の商標または登録商標です。Informatica の商標の最新リストは、Web (<https://www.informatica.com/trademarks.html>) にあります。その他の企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

本ソフトウェアまたはドキュメンテーション（あるいはその両方）の一部は、第三者が保有する著作権の対象となります。必要な第三者の通知は、製品に含まれています。

本マニュアルの情報は、予告なしに変更されることがあります。このドキュメントで問題が見つかった場合は、infa_documentation@informatica.com までご報告ください。

Informatica 製品は、それらが提供される契約の条件に従って保証されます。Informatica は、商品性、特定目的への適合性、非侵害性の保証等を含めて、明示的または黙示的ないかなる種類の保証をせず、本マニュアルの情報を「現状のまま」提供するものとします。

発行日: 2024-05-20

目次

序文	4
Informatica のリソース.....	4
Informatica マニュアル.....	4
Informatica Intelligent Cloud Services Web サイト.....	4
Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティ.....	4
Informatica Intelligent Cloud Services マーケットプレイス.....	5
データ統合のコネクタのドキュメント.....	5
Informatica ナレッジベース.....	5
Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center.....	5
Informatica グローバルカスタマサポート.....	5
第 1 章：トラブルシューティング	6
ストリーミング取り込みタスクのトラブルシューティング.....	6
データベース取り込みタスクのトラブルシューティング.....	8
ストリーミング統合タスクのトラブルシューティング.....	12
索引	14

序文

一括取り込みサービスのエラーのトラブルシューティングに関する情報を入手するには、「トラブルシューティング」をお読みください。

Informatica のリソース

Informatica は、Informatica Network やその他のオンラインポータルを通じてさまざまな製品リソースを提供しています。リソースを使用して Informatica 製品とソリューションを最大限に活用し、その他の Informatica ユーザーや各分野の専門家から知見を得ることができます。

Informatica マニュアル

Informatica マニュアルポータルでは、最新および最近の製品リリースに関するドキュメントの膨大なライブラリを参照できます。マニュアルポータルを利用するには、<https://docs.informatica.com> にアクセスしてください。

製品マニュアルに関する質問、コメント、ご意見については、Informatica マニュアルチーム (infa_documentation@informatica.com) までご連絡ください。

Informatica Intelligent Cloud Services Web サイト

Informatica Intelligent Cloud Services Web サイト (<http://www.informatica.com/cloud>) にアクセスできます。このサイトには、Informatica Cloud 統合サービスに関する情報が含まれます。

Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティ

Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティを使用して、技術的な問題について議論し、解決します。また、技術的なヒント、マニュアルの更新情報、FAQ（よくある質問）への答えを得ることもできます。

次の Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティにアクセスします。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/products/cloud-integration>

開発者は、次の Cloud 開発者コミュニティで詳細情報を確認したり、ヒントを共有したりできます。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/products/cloud-integration/cloud-developers>

Informatica Intelligent Cloud Services マーケットプレイス

Informatica マーケットプレイスにアクセスすると、データ統合コネクタ、テンプレート、およびマップレットを試用したり購入したりできます。

<https://marketplace.informatica.com/>

データ統合のコネクタのドキュメント

データ統合のコネクタのドキュメントには、マニュアルポータルからアクセスできます。マニュアルポータルを利用するには、<https://docs.informatica.com> にアクセスしてください。

Informatica ナレッジベース

Informatica ナレッジベースを使用して、ハウツー記事、ベストプラクティス、よくある質問に対する回答など、製品リソースを見つけることができます。

ナレッジベースを検索するには、<https://search.informatica.com> にアクセスしてください。ナレッジベースに関する質問、コメント、ご意見の連絡先は、Informatica ナレッジベースチーム (KB_Feedback@informatica.com) です。

Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center

Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center は、Informatica のセキュリティポリシーおよびリアルタイムでのシステムの可用性について情報を提供します。

Trust Center (<https://www.informatica.com/trust-center.html>) にアクセスします。

Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center にサブスクライブして、アップグレード、メンテナンス、およびインシデントの通知を受信します。[Informatica Intelligent Cloud Services Status](#) ページには、すべての Informatica Cloud 製品の実稼働ステータスが表示されます。メンテナンスの更新はすべてこのページに送信され、停止中は最新の情報が表示されます。更新と停止の通知がされるようにするには、Informatica Intelligent Cloud Services の 1 つのコンポーネントまたはすべてのコンポーネントについて更新の受信をサブスクライブします。すべてのコンポーネントにサブスクライブするのが、更新を逃さないようにするための最良の方法です。

サブスクライブするには、[Informatica Intelligent Cloud Services Status](#) ページで **【サブスクライブして更新】** をクリックします。電子メール、SMS テキストメッセージ、Webhook、RSS フィード、またはこの 4 つの任意に組み合わせとして送信される通知を受信するという選択ができます。

Informatica グローバルカスタマサポート

グローバルサポートセンターには、Informatica Network または電話でお問い合わせください。

Informatica Network でオンラインサポートリソースを検索するには、Informatica Intelligent Cloud Services のヘルプメニューで **【サポートにお問い合わせください】** をクリックして、**Cloud Support** ページに移動します。**Cloud Support** ページには、システムステータス情報とコミュニティディスカッションが記載されています。追加のリソースを検索する場合や電子メールで Informatica グローバルカスタマサポートに問い合わせる場合は、Informatica Network にログインし、**【サポートが必要な場合】** をクリックしてください。

Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica の Web サイト <https://www.informatica.com/services-and-training/support-services/contact-us.html> に掲載されています。

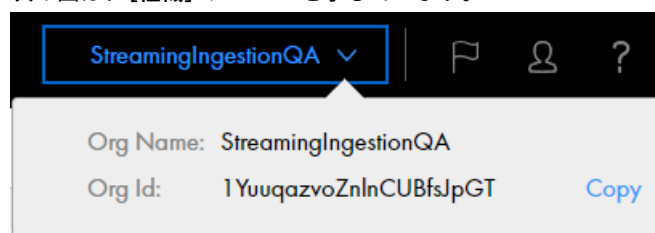
第 1 章

トラブルシューティング

次のセクションを使用して、一括取り込みのエラーをトラブルシューティングします。

注: 一括取り込みのサポートを受けるには、組織 ID を Informatica グローバルカスタマサポートに伝える必要があります。組織 ID は、右上隅にある【組織】メニューから確認できます。

次の図は、【組織】メニューを示しています。



組織 ID をコピーするには、【組織 ID】フィールドの右側にカーソルを置くと表示される【コピー】オプションをクリックします。

組織 ID は、管理者の【組織】ページで検索することもできます。

ストリーミング取り込みタスクのトラブルシューティング

ソースフィールドのサポートされていないデータ型をサポートされているデータ型に変更すると、変更がターゲットにレプリケートされない場合があります。

この問題は、【フィールドの修正】スキーマドリフトオプションが【レプリケート】に設定されていて、【フィールドの追加】オプションが【無視】に設定されている場合に発生します。

アプリケーション取り込みジョブをデプロイするときに、一括取り込みアプリケーションはサポートされていないデータ型のソースフィールドのターゲットカラムを作成しません。ソースフィールドのサポートされていないデータ型をサポートされているデータ型に変更した場合、一括取り込みアプリケーションはソースフィールドに対するカラムの変更操作を処理しますが、変更をターゲットにレプリケートしません。一括取り込みアプリケーションが、サポートされているデータ型のフィールドをターゲットに追加しようとする、スキーマドリフトオプション【列の追加】が【無視】に設定されているため、操作は無視されます。

この状況に対処するには、次の手順を実行します。

1. アプリケーション取り込みタスクウィザードの **【スケジュールとランタイムオプション】** ページの **【スキーマドリフトオプション】** セクションで、**【フィールドの追加】** オプションを **【レプリケート】** に設定します。
2. ソースフィールドのデータ型を、サポートされているデータ型に再度変更し、アプリケーション取り込みジョブがこのスキーマの変更を検出できるようにします。
注: アプリケーション取り込みジョブは、ソースフィールドのデータ型を変更する前に追加されたフィールド値をプロパゲートしません。
3. ソースフィールドのすべての値をターゲットにプロパゲートする場合は、ターゲットテーブルをソースと再同期します。

ソースのプライマリキー制約を変更した場合、一括取り込みアプリケーションは DDL の変更が発生したソースオブジェクトの処理を停止します。

この問題は、プライマリキー制約を追加または削除した場合、または既存のプライマリキーに対してフィールドを追加または削除した場合に発生します。

初期ジョブと増分ジョブを組み合わせたジョブでソースオブジェクトの処理を再開するには、ターゲットテーブルをソースと再同期します。

増分ジョブでソースオブジェクトの処理を再開するには、次の手順を実行します。

1. アプリケーション取り込みタスクウィザードの **【ソース】** ページで、ソースオブジェクトを除外するオブジェクト選択ルールを追加します。
2. タスクを再デプロイします。
一括取り込みアプリケーションは変更したタスクをデプロイし、除外されたオブジェクトのプライマリキーに関する情報を削除します。
3. タスクを再度編集して、ソースオブジェクトを除外したオブジェクト選択ルールを削除します。
4. タスクを再デプロイします。

多くのソースオブジェクトを処理し、Google BigQuery ターゲットを持つアプリケーション取り込み初期ロードジョブは、次のエラーで失敗する可能性があります。

The job has timed out on the server. Try increasing the timeout value.

この問題は、ジョブが多くのソースオブジェクトを処理するように構成されており、ソースオブジェクトの処理が完了する前に Google BigQuery ターゲット用に構成された接続がタイムアウトした場合に発生します。この問題を解決するには、ターゲットに設定されている Google BigQuery V2 接続のタイムアウト間隔を長くする必要があります。

接続のタイムアウト間隔を長くするには、次の手順を実行します。

1. Administrator で、アプリケーション取り込みジョブに関連付けられている Google BigQuery V2 接続を編集モードで開きます。
2. **【オプションのプロパティを指定】** フィールドで、timeout プロパティを、必要なタイムアウト間隔（秒単位）に設定します。次の形式を使用します。
`"timeout": "<timeout_interval_in_seconds>"`
3. 接続を保存します。
4. アプリケーション取り込みジョブを再デプロイします。

データベース取り込みタスクのトラブルシューティング

ソースカラムのサポートされていないデータ型をサポートされているデータ型に変更すると、変更がターゲットにレプリケートされない場合があります。

この問題は、**【カラムの修正】** スキーマドリフトオプションが **【レプリケート】** に設定されていて、**【カラムの追加】** オプションが **【無視】** に設定されている場合に発生します。

タスクをデプロイするときに、一括取り込みデータベースは、サポートされていないデータ型を持つソースカラムに対してターゲットカラムを作成しません。ソースカラムのサポートされていないデータ型を後でサポートされているデータ型に変更した場合、一括取り込みデータベースはソースに対するカラムの修正操作を処理しますが、変更をターゲットにレプリケートしません。一括取り込みデータベースがサポートされているデータ型のカラムをターゲットに追加しようとすると、スキーマドリフトオプション **【列の追加】** が **【無視】** に設定されているため、操作は無視されます。

この状況に対処するには、次の手順を実行します。

1. データベース取り込みタスクウィザードの **【スケジュールとランタイムオプション】** ページの **【スキーマドリフトオプション】** で、**【列の追加】** オプションを **【レプリケート】** に設定します。
2. ソースカラムのデータ型をサポートされているデータ型に再度変更し、データベース取り込みジョブがこのスキーマの変更を検出できるようにします。
データベース取り込みジョブは DDL 操作を処理し、新しいターゲットカラムを作成します。
注: データベース取り込みジョブは、ソースカラムのデータ型を変更する前に追加されたカラムの値をプロパゲートしません。
3. ソースカラムのすべての値をターゲットにプロパゲートする場合は、ターゲットテーブルをソースと再同期します。

ソースのプライマリキー制約を変更した場合、一括取り込みデータベースは DDL の変更が発生したソーステーブルの処理を停止します。

この問題は、プライマリキー制約を追加または削除した場合、または既存のプライマリキーに対してカラムを追加または削除した場合に発生します。

初期ジョブと増分ジョブを組み合わせたジョブでソーステーブルの処理を再開するには、ターゲットテーブルをソースと再同期します。

増分ジョブでソーステーブルの処理を再開するには、次の手順を実行します。

1. データベース取り込みタスク定義の **【ソース】** タブで、ソーステーブルを除外するテーブル選択ルールを追加します。
2. タスクを再デプロイします。
一括取り込みデータベースは編集したタスクをデプロイし、除外されたテーブルのプライマリキーに関する情報を削除します。
3. タスクを再度編集して、ソーステーブルを除外したテーブル選択ルールを削除します。
4. タスクを再デプロイします。

DDL のカラムレベルの変更によってソーステーブルサブタスクが停止するかエラーが発生した後、データベース取り込みジョブを再開すると、想定されているテーブル状態の変更が遅れます。

ソーステーブルでの DDL のカラムレベルの変更によってテーブルサブタスクが停止するかエラーが発生した後、データベース取り込みジョブを再開すると、テーブルに対して DML 操作が発生するまで、テーブルサブタスクの状態は変更されないままとなることがあります。例えば、増分または初期と増分の組み合わせのデータベース取り込みタスクでスキーマドリフトオプションを **【テーブルの停止】** に設定した後、ジョブをデプロイして実行すると、ソーステーブルに対して DDL の変更が発生した場合、ジョブモニタリングの詳細には、テーブルサブタスクがエラー状態であることが示されます。ジョブを停止し、スキーマ

ドリフトオーバーライドを使用してジョブを再開して DDL の変更をレプリケートすると、ソーステーブルに対して最初の DML 操作が発生するまで、テーブルサブタスクは一時的にエラー状態のままになります。

一括取り込みデータベースは、Snowflake ターゲットを持つタスクのデプロイに次のエラーで失敗します。

```
Information schema query returned too much data. Please repeat query with more selective predicates.
```

このエラーは、スキーマクエリに関連する既知の Snowflake の問題が原因で発生します。詳細については、Snowflake のドキュメントを参照してください。

一括取り込みデータベースでは、多数のソーステーブルが選択されている場合、このエラーによって、Snowflake ターゲットを持つデータベース取り込みタスクのデプロイに失敗することがあります。

デプロイの失敗に対処するには、ターゲットテーブルを削除します。次に、データベース取り込みタスクを更新して、ターゲットテーブルを生成する対象として選択するソーステーブルの数を減らします。次に、タスクを再度デプロイしてみます。

Linux で実行されるデータベース取り込みジョブは、次のメモリ不足エラーで異常終了します。

```
java.lang.OutOfMemoryError: unable to create new native thread
```

オペレーティングシステムに設定されているユーザープロセスの最大数を超過している可能性があります。最大ユーザープロセスの Linux ulimit 値がまだ **unlimited** に設定されていない場合、**unlimited** またはそれ以上の値に設定します。その後、ジョブを再開します。

アセットを、同じ名前のアセットがすでに含まれている別の場所にコピーすると、次のいずれかのエラーで操作が失敗する場合があります。

```
Operation succeeded on 1 artifacts, failed on 1 artifacts.  
Operation did not succeed on any of the artifacts.
```

アセットを、同じ名前のアセットが既に存在する別の場所にコピーしようとする、一括取り込みデータベースは、一方に「- Copy 1」などのサフィックスを付けることで両方のアセットを保持するかどうかを尋ねる警告メッセージを表示します。両方のアセットを保持することを選択した場合、一括取り込みデータベースは名前の長さを検証して、サフィックスが追加されても最大長の 50 文字を超えないことを確認します。名前の長さが 50 文字を超えると、コピー操作は失敗します。この場合、アセットを別の場所にコピーし、コピーの名前を変更してから、名前を変更したアセットを元の場所に戻す必要があります。

[スケジュールとランタイムオプション] ページのスキーマドリフトオプションが、ジョブログのオプションと一致しません

一括取り込みデータベースの Spring 2020 年 4 月リリースでは、[スケジュールとランタイムオプション] ページに表示される [スキーマドリフト] オプションの順序が変更されましたが、値は元の順序のままでした。Spring 2020 年 4 月リリース後、Fall 2020 年 12 月リリースより前に作成されたデータベース取り込みタスクを使用する場合、ジョブログの「schemaChangeRules」で報告されるように、関連するジョブが実行時に使用するスキーマドリフトオプションが、[ランタイムオプション] ページに表示される [スキーマドリフト] オプションと一致しない場合があります。この場合、[ランタイムオプション] ページの [スキーマドリフト] オプションをそれぞれリセットして、タスクを再度保存します。

Kafka コンシューマが次のいずれかのエラーで終了します。

```
org.apache.avro.AvroTypeException: Invalid default for field meta_data: null not a {"type":"array"}...  
org.apache.avro.AvroTypeException: Invalid default for field header: null not a {"type":"record"}...
```

このエラーは、コンシューマが新しい Avro バージョンにアップグレードされたが、古いバージョンの Avro スキーマファイルを引き続き使用しているために発生する可能性があります。

この問題を解決するには、一括取り込みデータベースが提供する新しい Avro スキーマファイルを使用します。

Confluent スキーマレジストリを使用する Kafka ターゲットに増分変更データをプロパゲートするデータベース取り込みジョブは、次のエラーで失敗します。

```
io.confluent.kafka.schemaregistry.client.rest.exceptions.RestClientException: Register operation timed out; error code: 50002
```

この問題は、ジョブが多くのソーステーブルを処理している場合に発生することがあります。多くのスキーマを処理するには Confluent スキーマレジストリが必要です。この問題を解決するには、Confluent スキーマレジストリの **kafkastore.timeout.ms** オプションの値を増やしてみてください。このオプションは、Kafka ストアに対する操作のタイムアウトを設定します。詳細については、Confluent スキーマレジストリのドキュメントを参照してください。

Google BigQuery **ターゲットを持つデータベース取り込みジョブのサブタスクは、次のエラーでソーステーブルの初期ロード処理を完了できません。**

The job has timed out on the server. Try increasing the timeout value.

この問題は、ジョブが多くのソーステーブルを処理するように構成されており、ソーステーブルの初期ロード処理が完了する前に Google BigQuery ターゲット接続がタイムアウトした場合に発生します。この問題を解決するには、Google BigQuery V2 ターゲット接続プロパティのタイムアウト間隔を増やします。

1. Administrator で、データベース取り込みジョブに関連付けられている Google BigQuery V2 接続を編集モードで開きます。
2. **【オプションのプロパティを指定】** フィールドで、timeout プロパティを、必要なタイムアウト間隔（秒単位）に設定します。次の形式を使用します。
`"timeout": "<timeout_interval_in_seconds>"`
3. 接続を保存します。
4. データベース取り込みタスクを再デプロイします。

Amazon Redshift **ターゲットを持つデータベース取り込みタスクは、デプロイ中に次のエラーのいずれかを返します。**

Mass Ingestion Databases could not find target table '*table_name*' which is mapped to source table '*table_name*' when deploying the database ingestion task.

com.amazon.redshift.util.RedshiftException: ERROR: Relation "*table_name*" already exists

この問題は、Amazon Redshift がデフォルトでテーブル名とカラム名を小文字として読み取るために発生します。

このエラーを防ぐために、データベースパラメータグループを設定するときに、`enable_case_sensitive_identifier` パラメータを「true」に設定します。このパラメータの詳細については、AWS Amazon Redshift のドキュメント (https://docs.aws.amazon.com/redshift/latest/dg/r_enable_case_sensitive_identifier.html) を参照してください。

ソーステーブルまたはカラム名にマルチバイト文字または特殊文字が含まれ、ターゲットが Databricks Delta である場合、データベース取り込みタスクのデプロイは失敗します。

デプロイ中に新しい Databricks Delta ターゲットテーブルが作成されると、Databricks Delta が使用する Hive メタストアにエントリが追加されます。Hive メタストアは通常 MySQL データベースです。より具体的に説明すると、カラム名はメタストアの `TABLE_PARAMS` フィールドに挿入されます。`TABLE_PARAMS` からの `PARAM_VALUE` の文字セット照合は `latin1_bin` であり、文字セットは `latin1` です。この文字セットは日本語の文字をサポートしていません。この問題を解決するには、照合が `UTF-8_bin`、文字セットが `UTF-8` である外部メタストアを作成します。詳細については、<https://docs.microsoft.com/en-us/azure/databricks/kb/metastore/jpn-char-external-metastore> と <https://kb.databricks.com/metastore/jpn-char-external-metastore.html> で Databricks Delta のドキュメントを参照してください。

Azure Synapse Analytics **ターゲットと、日本語データを持つテーブルが含まれている Oracle、PostgreSQL、または SAP HANA ソースを使用したデータベース取り込みの初期ロードタスクでは、ターゲットカラムに日本語データが???文字として書き込まれる場合があります。**

この問題を解決するには、タスクを編集して、次のソースデータ型をターゲットデータ型にマッピングするカスタムデータ型マッピングを追加します。

- Oracle ソースの場合:
VARCHAR2(25) -> NVARCHAR(MAX)
VARCHAR2 (152) -> NVARCHAR(MAX)
- PostgreSQL ソースの場合:
CHARACTER VARYING(25) -> NVARCHAR(MAX)
CHARACTER VARYING(125) -> NVARCHAR(MAX)
- SAP HANA ソースの場合:
TEXT(25) -> NVARCHAR(MAX)
TEXT(125) -> NVARCHAR(MAX)

XML データを含む SQL Server ソースと Microsoft Azure Synapse Analytics ターゲットを含むデータベース取り込みの初期ロードジョブが失敗する

500,000 文字以上の半角文字の XML カラムデータを含む SQL Server ソースと Microsoft Azure Synapse Analytics ターゲットを含むデータベース取り込みジョブを実行すると、Synapse Analytics がターゲットテーブルを作成するための SQL クエリを処理しようとした場合に、サブタスクが失敗することがあります。データをターゲットテーブルに書き込む前に、一括取り込みデータベースはデフォルトで XML データを 500,000 バイトに切り捨て、x バイトの補助メタデータを追加します。Synapse Analytics は、各ソース文字を 2 バイトとして格納し、最大行サイズは 1000000 バイトとなります。その結果、ターゲット表に書き込まれる行のバイト数が、最大ターゲット行サイズよりも大きくなる可能性があります。この場合、サブタスクは失敗し、トレースメッセージで次のような情報が報告されます。

Unexpected error encountered filling record reader buffer: HadoopExecutionException: The size of the schema/row at ordinal 1 is 1000050 bytes. It exceeds the maximum allowed row size of 1000000 bytes for Polybase.

この問題を修正するには、適切な下限切り捨てポイントを指定し、それをタスクウィザードの【**ターゲット**】ページの unloadClobTruncationSize カスタムプロパティで指定します。行に XML カラムが 1 つしかない場合は、<実際のスキーマ/行サイズ>と最大行サイズの差の分だけ切り捨てポイントを減らします。例えば、前述のサンプルメッセージに基づいて、1 つの XML カラムを含む行の下限切り捨てポイントを 500000 - 50、つまり、499950 バイトとして計算します。

Informatica ストアドプロシージャの処理中にプロセッサリソースの制限を超えると、Db2 for z/OS ソースを使用したデータベース取り込み増分ロードジョブが異常終了する

z/OS ソースシステムで SELECT、INSERT、UPDATE、DELETE などの SQL 操作で使用されるプロセッサリソースの量を制限するため、Db2 DSNRLSTxx リソース制限テーブルを使用すると、Db2 for z/OS ソースを使用したデータベース取り込み増分ロードジョブが異常終了する場合があります。デフォルトまたは設定されたリソース制限が、キャプチャされた変更データを処理するためにデータベース取り込みジョブが使用する WLM ストアドプロシージャの長時間処理に対応するのに十分な大きさでない場合、ジョブは終了します。リソース制限に関連する異常終了が発生した場合は、次の手順を実行します。

1. ランタイム環境で、データベース取り込みパッケージ専用のリソース制限テーブルに行を追加します。次のカラムを含む行を追加します。
 - データベース取り込みタスクが使用する認証 ID を持つ AUTHID カラムか、データベース取り込みタスクと同じパッケージ名を持つ RLFPDG カラム、またはこれら両方のカラム。
 - NULL またはデフォルトの制限値より大きいリソース制限が定義された ASUTIME カラム。
2. リソース制限テーブルへの変更を有効にするには、Db2 -START RLIMIT コマンドを発行します。

これらの手順を実行する権限がない場合は、Db2 DBA または z/OS のシステムプログラマに問い合わせてください。

ストリーミング統合タスクのトラブルシューティング

ストリーミング統合タスクを Amazon Kinesis ソースでデプロイしているときに、タスクのステータスが [稼働中] に変わった直後にデータを送信すると、データが失われます。

回避策: タスクをデプロイしてジョブとして実行した後、しばらく待ってからデータを送信してください。

Amazon DynamoDB からのストリームをコンシュームする Kinesis Streams ソースを使用したストリーミング統合ジョブは、Kinesis Streams から取り込んだデータの読み取りに失敗します。ストリーミング統合ジョブは [稼働中] ステータスで実行されますが、エラーは返されません。

Amazon DynamoDB ユーザーに次の必要な権限を付与します。

```
dynamodb:CreateTable
- dynamodb:DescribeTable
- dynamodb:Scan
- dynamodb:PutItem
- dynamodb:GetItem
- dynamodb:UpdateItem
- dynamodb>DeleteItem
Resource:
- !Join ["", ["arn:aws:dynamodb:*:", !Ref 'AWS::AccountId', ":table/*"]]
```

Amazon CloudWatch に次の権限を付与します。

```
"Action": "cloudwatch:DescribeAlarms"
"Action": "cloudwatch:PutMetricData"
```

Kafka 接続の作成中に、SSL モードが無効に設定されている場合、宣言されている他の追加の接続プロパティ値は考慮されません。

この問題をオーバーライドするには、[追加セキュリティプロパティ] フィールドで追加の接続プロパティを宣言します。

Kafka ターゲットに大量のデータを取り込もうとすると、ストリーミング統合ジョブの実行時に次のエラーが発生します。

A message in the stream exceeds the maximum allowed message size of 1048576 byte.

このエラーメッセージは、受信したメッセージサイズが Kafka サーバーが受信できる最大メッセージサイズである 1 MB を超える場合に表示されます。

Amazon Kinesis Firehose または Amazon Kinesis Streams のターゲットに大量のデータを取り込もうとすると、ストリーミング統合ジョブの実行時に次のエラーが発生します。

```
INFO - Mon Feb 04 07:01:44 UTC 2019PutKinesisStream[id=0421419e-b24f-4e3f-ad19-9a1fbc7b0f3c] Failed to
publish to kinesis records StandardFlowFileRecord[uuid=36926fcd-dfed-46f9-ae41-
a6d32c3d5633,claim=StandardContentClaim [resourceClaim=StandardResourceClaim[id=1549263211727-1,
container=default,section=1],offset=2758,
length=1067926],offset=0,name=testKinesis.2758-1070684.txt,size=1067926] because the size was greater
than 1024000 bytes
```

このエラーメッセージは、受信したメッセージサイズが Amazon Kinesis の最大メッセージバッファサイズである 1 MB を超える場合に表示されます。サイズが 1 MB を超えるメッセージはターゲットに到達せず、転送中に失われます。

Amazon Kinesis ソースを持つストリーミング統合タスクのデプロイ中に、データ損失が発生します。

回避策: この問題を解決するには、ジョブとして実行するためにタスクをデプロイした後、データフローが [停止]、[デプロイ中]、[編集]、または [再デプロイ] の状態のときにデータを送信しないでください。

索引

C

Cloud アプリケーション統合コミュニティ
URL [4](#)
Cloud 開発者コミュニティ
URL [4](#)

I

Informatica Intelligent Cloud Services
Web サイト [4](#)
Informatica グローバルカスタマサポート
連絡先情報 [5](#)

W

Web サイト [4](#)

あ

アップグレード通知 [5](#)

し

システムステータス [5](#)

す

ステータス
Informatica Intelligent Cloud Services [5](#)
ストリーミング取り込み
トラブルシューティング [12](#)

て

データベース取り込み
トラブルシューティング [8](#)

と

トラブルシューティング
ストリーミング取り込みタスク [12](#)
データベース取り込みタスク [8](#)

め

メンテナンスの停止 [5](#)